

彦根市埋蔵文化財調査報告 第8集

竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡(第4次)

＝市道小泉・河瀬線改良工事に伴う＝

昭和60年3月

彦根市教育委員会

## 序

長年の懸案でありました博物館建設計画もいよいよ実施段階に入りました。この博物館建設計画を契機として全市的に文化財に対する関心が高まりつつある現在ですが、より一層の文化財保護の精神の高揚を計る絶好の機会であると言えましょう。そういう意味で文化財の調査研究活動は、基礎的な活動であるとともに長期的な視野に立った活動でなければいけません。

本書は市道小泉・河瀬線改良工事に先づ事前発掘調査の結果をまとめた概要報告ではありますが、遺跡の持つ歴史的な意味を御理解いただくとともに研究の一助になれば幸いです。なお、竹ヶ鼻廃寺につきましては調査部分をサンド・マット工法により遺構面に直接負担のかからないよう埋戻しをいたしました。

文末になりましたが、遺跡の重要性を御理解いただき御協力御助力いただきました関係者各位の方々に対しまして深く謝意を表するものであります。

昭和55年3月  
60

彦根市教育委員会

教育長 河原 保男

## 例　　言

1. 本書は、滋賀県彦根市竹ヶ鼻町穂ノ口178他に所在する竹ヶ鼻廃寺および滋賀県彦根市西今町字中郷市18他に所在する品井戸遺跡（第4次）の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、市道小泉・河瀬線改良工事に伴うもので、彦根市建設部の委託を受けて、彦根市教育委員会社会教育課が実施した。
3. 調査は、竹ヶ鼻廃寺発掘調査が昭和58年12月から昭和59年3月・品井戸遺跡（第4次）発掘調査が昭和59年10月から昭和60年3月までの期間を要した。
4. 調査は、社会教育課技師本田修平が担当した。また、現地における図面等は調査協力員桂田峰男（仏教大学O. B）が主にあたった。
5. 現地調査・整理作業にあたっては、多くの方々に御協力を得た。記して謝意を表したい。

## 1. はじめに

本調査は、市道小泉・河瀬線の工事に伴い事前に発掘調査を実施したものである。市道小泉・河瀬線は、国鉄東海道本線南彦根駅東口に接続し、国道8号線とほぼ並行して走る様に計画されている。調査地は犬上川と南彦根駅との間で、現状の地形は中間部に小河川が北流して微高地が2分される形になっている。また、用地買収の関係で2ヶ年に調査期間がまたがったことから、遺跡名を竹ヶ鼻廃寺と品井戸遺跡とした。両遺跡の調査年度は、竹ヶ鼻廃寺の発掘調査が昭和58年度、品井戸遺跡が昭和59年度である。なお、品井戸遺跡は今回の発掘調査で第4次の調査になる。

調査地は旧福満村に属していた地域で、この旧福満村は犬上川北岸の沖積地から旧デルタ地帯に位置している。現在の犬上川は竹ヶ鼻町を先端とする微高地に流路をはばまれ、旧福満村を迂回するように回り込んで流れしており、また小河川も旧福満村内を網目状に流れている。古代においては、犬上川の広範な後背湿地と微高地から成る地形であった事が考えられる。この様な自然地理的な条件は、古代における生活条件として最も良い環境であり、縄文時代以降多数の遺跡が営まれたことが現在知られている。

竹ヶ鼻廃寺は、竹ヶ鼻町東側の農地に古瓦の散布地として古くから知られ、重要遺跡になっている遺跡である。古瓦の散布地は周辺の農地と異なる地割を持ち、また「上寺街道」等の小字名も残っている。『彦根市史』では外区を重闇文で飾る単弁蓮華文軒丸瓦等の出土から、白鳳時代に成立した寺院跡であると考えている。また、散布遺物は古瓦に限らず、須恵器も見られることからこの遺跡の成立が古墳時代後期までは確實に遡る事が確認されていた。遺物の散布地は、現在では国鉄東海道本線の路床で2分された様になっているが、犬上川堤防下の微高地全体に広がっている。

地元の人の話では、国鉄東海道本線の工事の際に周辺の農地を削平して路床の盛り土に使用したとの事で、遺跡の残存状況を確認する事が必要であると考えられた為に昭和58年3月に試掘調査を実施した。試掘調査は、用地の関係で都恵神社東側の農地だけに限られ、品井戸遺跡の範囲まで試掘トレンチを設定する事はできなかった。試掘トレンチはほぼ $5 \times 5$ mで、設定可能な田に3ヶ所設定して遺跡の範囲、保存状況等を確認する事を主旨とした。この試掘調査では、3ヶ所ともに30~50cmの耕作土を取り去るとピットを主体とする遺構面が確認でき、また出土遺物も縄目叩き痕を持つ布目瓦や須恵器等が出土し、少なくとも古墳時代後期から奈良時代におよぶ複合遺跡であることが確実となった。

上記の調査結果から、当市教育委員会は市土木課と協議し、市道小泉・河瀬線の着工以前に事前調査を計画するに至った。事前の発掘調査は当初昭和58年度事業として実施する

予定で計画していたが、前述した様に用地買収等の関係で両遺跡を同時に調査することが不可能になったため、昭和58年度、同59年度の2ヶ年に分かれる調査に計画を変更した。

竹ヶ鼻廃寺の発掘調査は、昭和58年12月から同59年3月までの期間を要したが、近年稀に見る大雪のために十分な調査を行えないまま時間が過ぎてしまった。

また、品井戸遺跡の発掘調査は、昭和59年10月から12月までの期間を要した。その後、遺物・図面等の整理作業を実施した。

## 2. 竹ヶ鼻廃寺発掘調査の結果

調査地は、犬上川堤防で県道と交差する地点から北側南彦根駅東口に向って伸びている。調査地内には農道・農業用水路等が通っており、トレンチは現状の地割を尊重しながら設定さざるを得なかった。また、道路予定地内に堆土を置かねばならない事から、トレンチを4ヶ所設定し発掘調査を実施した。トレンチは、犬上川堤防下の一段高い田に設定した1Tから順に2・3・4Tとした。このうち農道北側の揚水小屋がある田に設定した3Tは遺構が確認できなかったが、1・2・4Tでは基本的に40~50cmの耕作土を取り去ると遺構面となるが、一部マンガンの沈着が強い包含層が認められた。以下、1・2・4Tについて調査結果を記したい。

### 〔1トレンチ〕

犬上川堤防下で県道迂回路横に設定したトレンチで、 $6.5 \times 17m$ の大きさである。土層は40cmの耕作土の下が黄褐色粘質土の床土となり、この層が遺構面になる。この面でトレンチの短辺に平行して走る灰色土が入り込んだ巾30~50cmの溝が9本検出できたが、入り込んだ土や等間隔で平行して走る事等より旧田面の歴跡と考えられ、この時点で遺構面がかなり削平を受けた事が考えられる。

遺構は、ピットを11ヶ所確認したにとどまった。このうちトレンチ中央部付近の方形ピットは、3つが2m間隔で並び、遺構面の削平を考えれば掘立柱建物の痕跡である可能性がある。

### 〔2トレンチ〕

1トレンチ東側50cmほど低い田に設定したトレンチで、試掘調査の時点で遺構面を確認しているため、可能な限り面的に広げてトレンチを設定した。このために、トレンチは変則的な形になった。

土層は、基本的に1トレンチと変わらず40~50cmの耕作土を取り去ると黄褐色粘質土の床土となりこの面が遺構面であるが、トレンチ西側は茶褐色粘質土で遺物が混じる。しかし耕作土を取り去った面で焼土・ピット等が確認できた。

遺構は堅穴住居跡・掘立柱建物跡・ピットを確認した。現在建物跡と考えているものは、堅穴住居跡8棟・掘立柱建物跡8棟である。トレンチ東側は遺構の残存状態が悪くトレンチ南側で検出した堅穴住居跡は周構・柱穴が確認できただけである事から、遺構面がかなり削平を受けていると考えられ、掘り込みの深いものだけが残存したと思われる。また、

トレンチ北側は旧耕作面と考えられる畝跡が検出され、畝の間には耕作土に似た土が入り込んでいた。次に各遺構について記したい。

#### S H - 1

トレンチ南端で確認できた堅穴住居跡で、一辺3.5mの方形プランを持ち周溝をめぐらしている。周溝の深さは5cm、柱穴は径30cmで4ヶ所確認され、主軸はN-13°-Wであった。

#### S H - 2

S H - 3 の住居跡に切られて西側から検出された住居跡で一辺6.5mの方形プランを持つ住居跡である。この住居跡も天候の関係で床土面まで掘り込めなかった。埋土中からの出土遺物は須恵器・土師器片が主であった。主軸はN-34°-Eである。西側壁で焼土が確認されている。

#### S H - 3

トレンチ西側で検出された住居跡で、S H - 2 を切っている。プランは4.8m×5.6mの方形で、東側壁面に焼土が確認されている。この住居跡は掘り込み途中で積雪水没を繰り返したため、床面まで掘り込めなかった。埋土中の遺物は、7世紀代に入る須恵器壺身等が出土している。主軸はN-87°-Eであった。

#### S H - 4

S H - 6 の東側で検出された住居跡で一辺3.4mのプランを持つ。東壁側は田の畔があり、マンガン等の沈着が強くS H - 6 との切り合い状態は不明である。主軸はN-68°-Eである。

#### S H - 6

今回検出された堅穴住居跡中最大のもので1辺7.9mと考えられる隅丸方形のプランを持つ。南側角に焼土があり、深さ50cmほどで床面となる。この住居跡も東側旧畦畔がマンガン等の沈着が強く東側隅の検出が不能であった。この住居跡は古墳時代前期の土師器が出土しており確認でした遺構の中では一番古いものと考えられる。主軸はN-78°-Wである。

#### S H - 8 • S H - 7

トレンチ中央部で一辺3.4mの方形プランを持つ住居跡である。S H - 8 の埋土は茶褐色粘質土であり、この中に黒褐色粘質土の落ち込みがあり、S H - 7 として掘り込んだが一辺2mであり、堅穴住居跡とは考えにくい。また、この東側の壁は検出できなかった。出土遺物は埋土中から須恵器・土師器片が出土しており、主軸はN-40°-Eである。

#### S H - 9 • S H - 10

トレンチ北端の旧田面の畝跡を削り込んで確認した住居跡で、調査期間の関係で掘り込めなかった。S H - 9 は一辺5.2mの方形プランを持ち、主軸はN-43°-Eである。ま

た、SH-10は一辺3.5mの方形プランで、主軸はN-50°-Eであった。

掘立柱建物跡は前記した様にトレンチ南側は遺構面がかなり削平を受けており、またトレンチ北側はマンガンの沈着が強く見落しがあると考えられ、ほとんどの建物跡が柱穴がとんでいる。

#### SB-1

トレンチ東側中央部で検出した2間×3間の建物跡で、SB-2を切れていると考えられ、桁行2m・梁行1.5mで主軸はN-87°-Wである。

#### SB-2

SB-1の北側で検出した2間×3間の建物跡で、桁行1.3m・梁行1.3mで主軸をN-70°-Wとする建物跡である。

#### SB-3

トレンチ東側で検出された2間×3間と考えられる建物跡で、主軸はN-51°-Eで桁行2.1mである。

#### SB-4

SB-3の北側で検出された2間×2間の建物跡で、主軸をN-34°-Eとし桁行2m・梁行2.4mである。

#### SB-5

トレンチ北側中央部で4棟が検出された中の一番東側のもので1間×2間の建物跡である。主軸はN-71°-Wで桁行1.8m・梁行1.5mである。

#### SB-6

SB-5と平行すると考えられる1間×2間の建物跡で、主軸はN-70°-Wで桁行1.8m・梁行1.8mである。

#### SB-7

1間×2間の建物跡で、主軸はN-28°-Eで桁行1.8m・梁行2.4mである。

#### SB-8

2間×3間と考えられる建物跡で、主軸はN-48°-Wで桁行1.8m・梁行1.5mである。

### 【4 トレンチ】

ピットが確認できたが、遺構面を精査している段階で大雪のために水没してしまい十分な調査ができなかった。このため、ピットの時期・性格は不明である。

### 3. 品井戸遺跡(第4次)の発掘調査結果

昭和58年度に調査した竹ヶ鼻廃寺の北側小河川をわたった微高地上に位置する遺物の散布地である。市道用地内にトレンチを5ヶ所設定して遺構等遺跡の性格や範囲を確認することを主目的とした。基本土層は全体に同一で、40~50cmの耕作土を取り去ると第2層の茶褐色粘質土の床土が遺構面になる。

#### 〔1 トレンチ〕

微高地西端に設定したトレンチで、現在の耕作土を取り去ると茶褐色粘質土の遺構面になる。しかし、マンガンの沈着が強い包含層があったため10cmほど第2層を掘り下げた。第2層で旧田面の地割の溝がN-27°-W方向にふった形で検出した。包含層では須恵器・土師器片および滑石製と思われる石帶が出土した。

S B-1

トレンチ北側で検出されたもので、2間×3間と考えられる。柱間は桁行1.7m・梁行1.5mで、主軸はN-25°-Wである。

S B-2

トレンチ中央部で確認した桁行1.2m・梁行1.4mの1間×2間の建物跡で、主軸はN-42°-Wである。

S B-3

S B-2にほぼ直角に対応し、桁行2m・梁行2.8mの1間×2間の建物跡で、主軸はN-45°-Wである。

S B-4

トレンチ南端で確認した桁行2m・梁行2mの2間×2間の建物跡で、主軸はN-81°-Wである。

#### 〔2 トレンチ〕

旧田面溝や一段低い旧田面等が確認され、田が広げられた過程がわかるトレンチである。

S B-5

トレンチ東端で確認した桁行2m・梁行1.7mの2間×3間と考えられる建物跡で、主軸はN-15°-Wである。

〔3 トレンチ〕

一段高い田の北端に設定したトレンチで旧田面の溝等が検出されている。

S B-6

トレンチ東側で桁行1.9m・梁行1.5mの2間×2間以上の建物跡で、主軸はN-75°-Eである。

〔4・5 トレンチ〕

遺跡構が確認できた田より50cmほど低い田に設定したトレンチで、旧田面の溝および畝が確認できた。各トレンチで検出した旧田面は溝内で染付陶器等が出土しており、近世に形成されたものと考えられる。

## 4. ま　と　め

今回の発掘調査で竹ヶ鼻廃寺に関連する遺構の検出が期待されたが、唐草文軒平瓦等の出土だけで直接の寺院関係の遺構は確認できなかった。ただし、遺構は堅穴住居跡・掘立柱建物跡が検出でき、今回の調査地点は集落跡である事が確認できた。また、品井戸遺跡でも掘立柱建物跡が確認されたことから考えれば、犬上川後背湿地の小微高地上に集落が広がっていたと思われる。

堅穴住居跡はSH-6が一番古く出土遺物から見て古墳時代前期のものであり、切り合いかから最低2時期にわたると考えられる。また、掘立柱建物跡は柱穴からの遺物の出土が極小量であり、その時期を示す資料がないが、堅穴住居跡を切っているピットが多い事からこれよりは時代が下るか、もしくは一部並行していたと考えられる。堅穴住居跡は十分掘り込んだものではなく資料的に不十分であるが、埋土の遺物から見て7世紀前半でおさまる可能性がある。掘立柱建物跡は、切り合いや主軸の方向から見て2時期にグルーピングできる。品井戸遺跡の掘立柱建物跡についても、切り合いは2時期である。ただし調査面積が少なく出土遺物も少量で包含層は旧田面で削平されているため、竹ヶ鼻の調査地同様その時代を決定することは不可能である。

今回の調査では、その地形から遺跡名を竹ヶ鼻廃寺と品井戸遺跡として調査したが、調査結果から見れば両遺跡ともに付近に寺院跡の存在を示す網目叩きを持つ布目瓦の出土を見ているが、寺院の遺構は検出できなかった。また、遺構から見れば集落跡であり、竹ヶ鼻廃寺周辺の集落跡である事が考えられる。この集落は古墳時代前期まで遡り、白鳳時代と言われる竹ヶ鼻廃寺に先行して存在した。

上記のことより考えれば、今回調査した両遺跡周辺は竹ヶ鼻廃寺関連遺跡として一括して考えることが妥当であると考えられる。

周辺の遺跡では、後期古墳であると言われる椿塚古墳や品井戸遺跡第2次調査で方形周溝墓もしくは方墳と考えられる古墳時代前期の遺構を確認しており、竹ヶ鼻廃寺の存在を合わせて考えれば、この集落が犬上川北岸の拠点的な集落であると考えられよう。

出土遺物観察表

番号	器形	口径	形 態	調 整	備 考
1	甕	19.2cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁は扁曲し立上る受口状口縁をなす。最大腹径は中位部である。</li> <li>○底部はくぼみ底をなす。口縁外側と頸部下にヘラ状工具によるヶ文をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部及び頸部は内外面とともにナデ調整。</li> <li>○体部は器表剥脱のため不明であるが、外側はハケ調整で内面は中位部下までナデ調整で、底部付近はハケ調整。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：良好 色調：明赤褐色 焼成：やや軟
2	長甕	24.4cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は外傾して開き端部を上方につまみ出す。体部は肩が張らない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○頸部及び口縁部は横ナデ調整。</li> <li>○体部外側は平行線状のタキ成形と考えられ、内面は器表剥脱のため不明である。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：良好 色調：明赤褐色 焼成：やや軟
3	甕	12.6cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁は外傾して立上る単純「く」の字状口縁で内面に三本の平行線のヘラ記号をもつ。最大腹径は中位部で底部は丸底である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○頸部及び口縁部は内外面ともに横ナデ調整。体部外側は上部半がハケ調整で中位部から底部はヘラ削り調整。内面は中位部までハケ調整、その下は不明。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡白褐色 焼成：やや軟
4	甕	11.8cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部は外傾して開く単純「く」の字口縁である。体部はあまり肩が張らない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○頸部及び口縁部は内外面ともに横ナデ調整。体部は内外面ともにハケ調整。</li> </ul>	3-T 2層 胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：硬
5	長甕	12.4cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部はやや内窪して立上り、端部は内側に若干つまみ出される。体部はあまり肩が張らない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部及び体部外側はハケ調整のうち横ナデ調整。内面は横ナデ調整。</li> </ul>	3-T 2層 胎土：精良 色調：明赤褐色 焼成：硬
6	器台	18.9cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器台受部は直線的に開き、脚部はラッパ状に開く。透しは前後に3孔ずつ穿たれている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表剥脱のため内外面とも不明。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：軟
7	器台	14.2cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器台受部は内窓気味に開き、端部を面取して平らに作る。脚部はロート状に開き、3孔を穿つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表剥脱のため内外面とも不明。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：軟
8	器台	17.6cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器台受部は直線的に開き、端部外側を弱くつまみ出す。</li> <li>○脚部はラッパ状に開き、3孔を穿つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表剥脱のため内外面とも不明。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：軟
9	器台	9.8cm	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器台受部は直線的に開き、端部内側を弱くつまみ出す。</li> <li>○脚部はロート状に開き、3孔を穿つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表剥脱のため内外面とも不明。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：良好 色調：暗灰色 焼成：やや軟
10	器台	8.6cm (脚部径)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器台受部は直線的に開く。</li> <li>○脚部はラッパ状に開き端部を丸くおさめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表剥脱のため内外面とも不明。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡赤褐色 焼成：硬
11	器台	8.4cm (脚部径)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○脚部は太い脚中部より直線的に開き、端部を丸くおさめ3孔を穿つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○器表剥脱のため内外面とも不明。</li> </ul>	2-T 2層 胎土：良 色調：暗灰色 焼成：軟

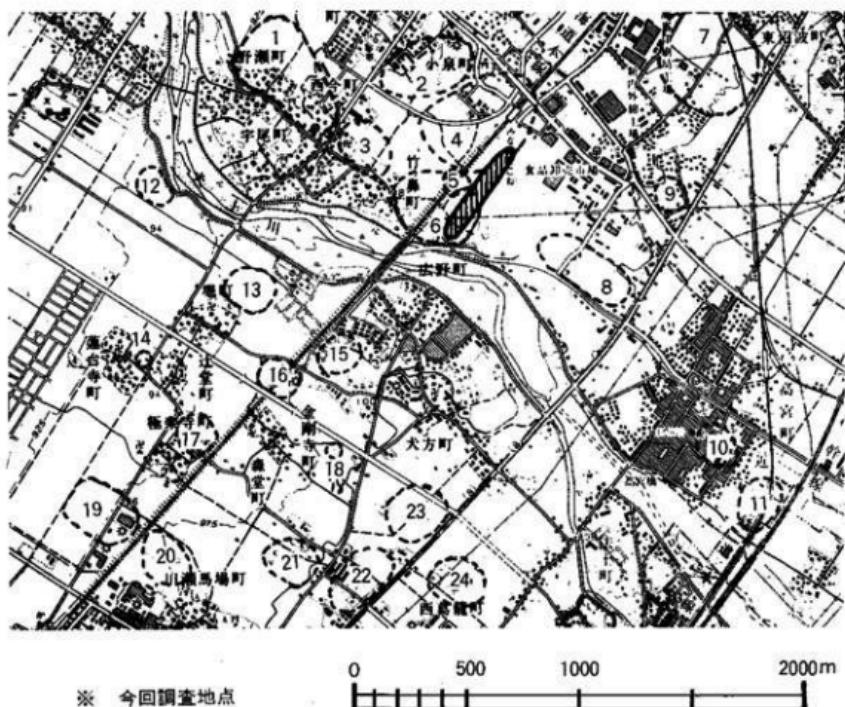
番号	器形	口径	形 態	調 整	備 考
12	高 坯	13.8cm	○坏部は斜傾して開き、端部を丸くおさめる。	○器表剥脱のため内外面とも不明。	2-T 2層 胎土：精良 色調：灰褐色 焼成：軟
13	高 坩	13.4cm (脚部径)	○脚部はラッパ状にひろがり、端部を平らにおさめる。	○器表剥脱のため内外面とも不明。	2-T 2層 胎土：精良 色調：明褐色 焼成：やや軟
14	高 坩	9.5cm (脚部径)	○脚部はラッパ状に開き、端部を丸くおさめ4孔を穿つ。	○器表剥脱のため内外面とも不明。	2-T 2層 胎土：精良 色調：黒灰色 焼成：やや軟
15	高 坩	7.8cm (脚部径)	○脚部はラッパ状に開き、端部を丸くおさめる。	○器表剥脱のため内外面とも不明。	2-T 2層 胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：やや軟
16	壺	15.4cm	○口縁部を垂下させる複合口縁で、口縁部外面には綾杉文状烈点文をつけ、垂下部外面にはくし状工具による回線文をつけ棒状浮文を飾る。	○頸部及び口縁部は横ナデ調整。	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡褐色 焼成：軟
17	壺	最大腹径 27.4cm	○体部はややおしつぶされた球形をなし、底部はくぼみ底に作られる。肩部にハケ状工具による弱い回線文をつけ、その間に綾杉状の烈点文を飾る。	○器表剥脱のため内外面とも不明ではあるが、外面ヘラ磨き、内面ハケ調整と思われる。	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡白褐色 焼成：軟
18	壺	18.4cm	○口縁部はやや外反して開き、端部を丸くおさめる。	○口縁部は内外面ともに横ナデ調整。	2-T 住-6内 胎土：良好 色調：明赤褐色 焼成：硬
19	小形 丸底 壺	6.8cm	○口縁部は外傾して立上り、端部を丸くおさめる。体部はややおしつぶされた球形をなし、底部は丸底である。	○口縁部は内外面とも横ナデ調整。 ○体部は器表剥脱のため不明。	2-T 住-6 胎土：良好 色調：淡黄褐色 焼成：硬
20	鉢	14.8cm	○丸くつくられた体部より口縁部は立上り、端部を丸くおさめる。口縁部外面にヘラ状工具による一条の凹点をつける。	○器表剥脱のため内外面とも不明。 ○体部上部外面に粘土膜のあとがある。	3-T 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：軟
21	鉢	15.0cm	○体部は内窪しながら開き、口縁部はやや外反気味に立上り、端部を丸くおさめる。	○器表剥脱のため内外面とも不明。	3-T 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：軟

番号	器形	口径	形態	調整	備考
22	坏	12.4cm	○体部は内寄しながら開き、口縁部は外反して立上り端部を丸くおさめる。	○横ナデ調整であるが、体部外面には指頭圧痕を残す。	2-T 2層 胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：やや軟
23	皿	14.8cm	○体部は内寄して開き、口縁部は屈曲して外反し端部内側を弱くつまみ出す。	○口縁部は内外面ともに横ナデ調整。 体部内面はハケ調整のうちにナデ調整。体部外面は指頭圧痕が残り、不調整と思われる。	2-T 2層 胎土：良好 色調：白褐色 焼成：やや硬
24	土鉢				2-T 2層 胎土：精良 色調：淡白褐色 焼成：硬
25	取手付壺	24.2cm	○口縁部は弱く内寄しながら立上り端部外面を弱く引きだす。体部はやや肩のはった球状をなし、最大腹径の所に取手をつける。	○底部及び口縁部は横ナデ調整。 ○体部は外面平行タタキを残し、内面青海波文を残すタタキ調整のちナデ調整。取手は貼り付けで指頭圧痕を残す。	2-T 2層 胎土：良 色調：淡灰色 焼成：やや軟
26	有蓋高坏の壺	11.6cm	○掛部はドーム状の天井部より太い回線でくぎられ、ほぼ直線的に垂下し端部は段をつける。つまみは体部に比してやや大きくなっている。	○内外面ともにロクロナデ調整。	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡青色 焼成：硬
27	有蓋高坏の蓋	13.8cm	○ドーム状の天井部より弱い回線でくぎられ、やや内寄しながら垂下する受部を作り端部を丸くおさめる。ツマミは小ぶりである。	○内外面ともロクロナデ調整。	2-T 2層 胎土：良好 色調：青灰色 焼成：硬
28	有蓋高坏	11.2cm	○坏部は内寄気味に開き、受部は強く内傾して立上り端部を丸くおさめる。脚部はロート状に開き、横方向に張り出し端部を面取りする。	○内外面ともロクロナデ調整。	3-T 2層 胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬
29	坏蓋	14.2cm	○ドーム状の天井より掛部はそのままつながり、端部を外側に引き出され丸くおさめる。	○天井部外面はヘラぎり。その他は内外面ともにロクロナデ調整。	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬
30	坏蓋	12.8cm	○天井部はほぼ平らに作られ、ドーム状の体部より掛部は弱く屈曲して垂下し、端部を丸くおさめる。	○天井部外面はヘラぎり。その他は内外面ともにロクロナデ調整。	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬
31	坏蓋	10.8cm	○ドーム状の天井部より掛部はそのまま内寄しながら垂下し、端部を丸くおさめる。	○天井部外面はヘラぎり。その他は内外面ともにロクロナデ調整。	2-T 2層 胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬

番号	器形	口径	形 態	調 整	備 考
32	坏身	11.4cm	○内窓しながら開く体部より、受部は強く内傾して上半分を上方に折り上げ端部を丸くおさめる。	○底部はヘラぎり、その他はロクロナデ調整。	2-T 住-2 2層 胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬
33	坏身	9.6cm	○体部は直線的に開き、受部は強く内傾して立上り端部を丸くおさめる。	○底部はヘラぎり、その他はロクロナデ調整。	2-T 2層 住居跡No.6 胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬
34	坏身	7.5cm	○型の坏身で弱く内窓しながら開き、受部は強く内傾して立上り端部を丸くおさめる。	○底部はヘラぎり、その他はロクロナデ調整。	2-T 住-6内 胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬
35	坏身	11.9cm	○ほぼ平たんな底部から体部は屈曲しやや外反気味に開き口縁部に至り、端部はやや外側に引き出された形で丸くおさめる。	○底部はヘラぎりで不調整、その他内外面ともロクロナデ調整。	2-T 住-3 胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬
36	坏身	12.0cm	○ほぼ平たんな底部から体部は屈曲しやや外反気味に開き口縁部に至り、端部はやや外側に引き出された形で丸くおさめる。	○底部はヘラぎりで不調整、その他内外面ともロクロナデ調整。	2-T 2層 胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬
37	甕	41.3cm	○口縁部は外反気味に開き、端部を丸くおさめる。外面には3段の段を作り、その間にくし状工具による波状文をつける。	○内外面ともロクロナデ調整。	品井戸 .5-T 溝-1 胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬
38	石帯		○滑石製と思われる。 半円形の丸輪で帯に留めるための3孔を穿つ。		品井戸 1-T 虹張
39	平瓦			○表面に布目痕、裏面に平行線状のタタキ痕を残す。	2-T 2層 胎土：良好 色調：白褐色 焼成：やや軟
40	軒平瓦			○宝珠で飾られた外区をもち、内区に忍冬唐草文を飾る。	2-T 2層 胎土：良好 色調：白灰色 焼成：軟
41	瓦			○表面に布目痕、裏面に繩目のタタキ痕を残す。	2-T 2層 胎土：良好 色調：明赤褐色 焼成：軟

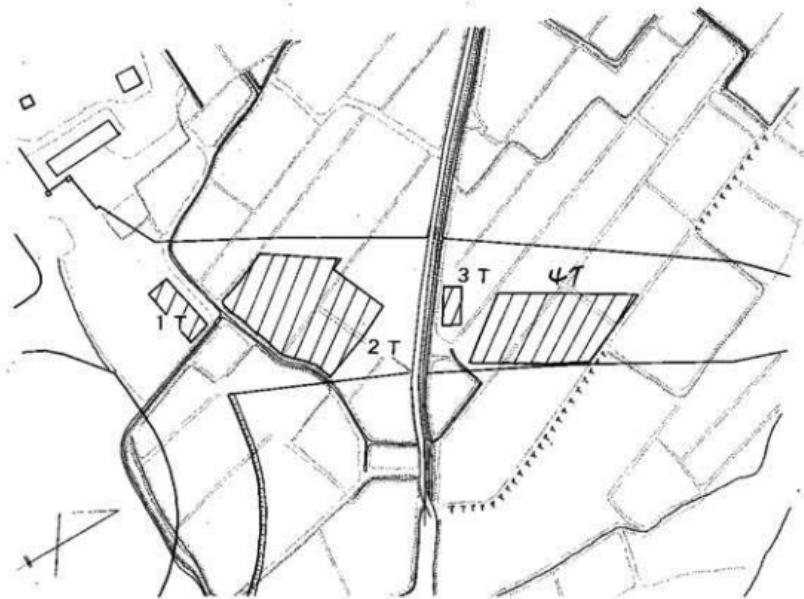
番号	器形	口径	形態	調整	備考
42	瓦			○器表剥脱のため調整法不明。	2-T 2層 胎土：やや粗 色調：明赤褐色 焼成：軟
43	甕 (土師甕)			○表面に格子タタキ痕を残す薄手の土器であるが、裏面は器表剥脱のため調整法不明。	3-T 2層 胎土：良 色調：乳褐色 焼成：軟





1	須川遺跡	9	遊行塚遺跡	17	辻ノ東遺跡
2	福満遺跡	10	高宮城跡	18	神ノ木遺跡
3	西今東遺跡	11	カツトリ遺跡	19	杉田遺跡
4	品井戸遺跡	12	上沢尻遺跡	20	西海道遺跡
5	椿塚遺跡	13	門田遺跡	21	天田遺跡
6	竹ヶ鼻遺跡	14	蓮台寺城跡	22	極楽寺遺跡
7	道ノ下遺跡	15	横地遺跡	23	段の東遺跡
8	丁田遺跡	16	石原遺跡	24	葛籠北遺跡

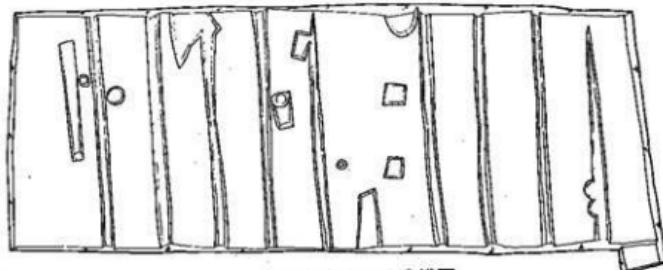
図版1 調査地点と周辺の遺跡



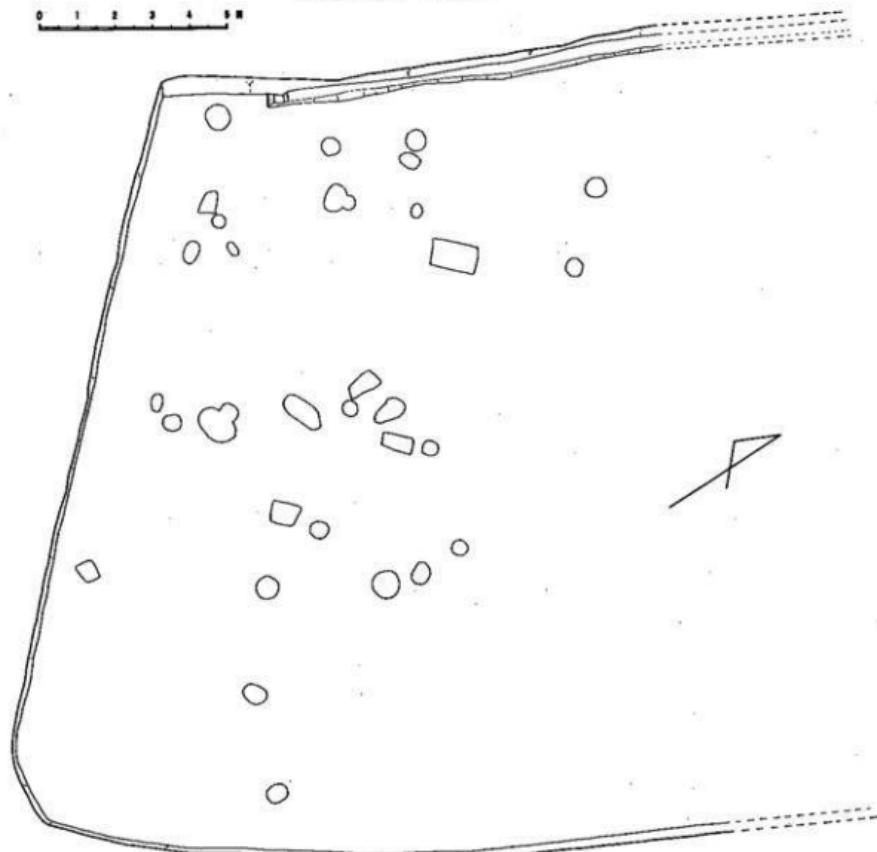
竹ヶ鼻遺跡トレンチ配置図



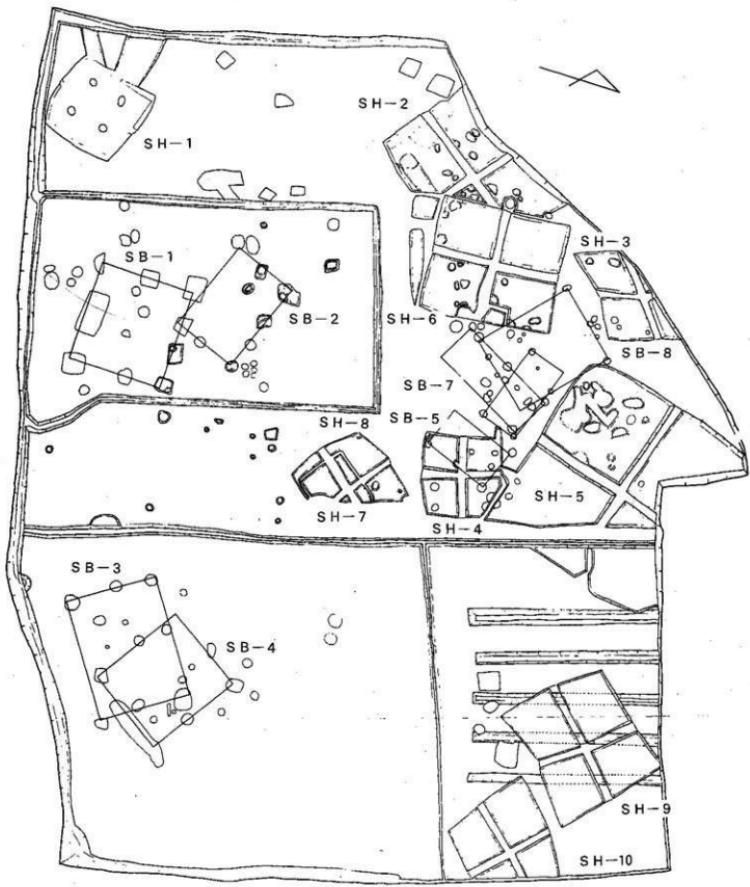
品井戸遺跡トレンチ配置図



竹ヶ鼻遺跡 1 T 遺構図

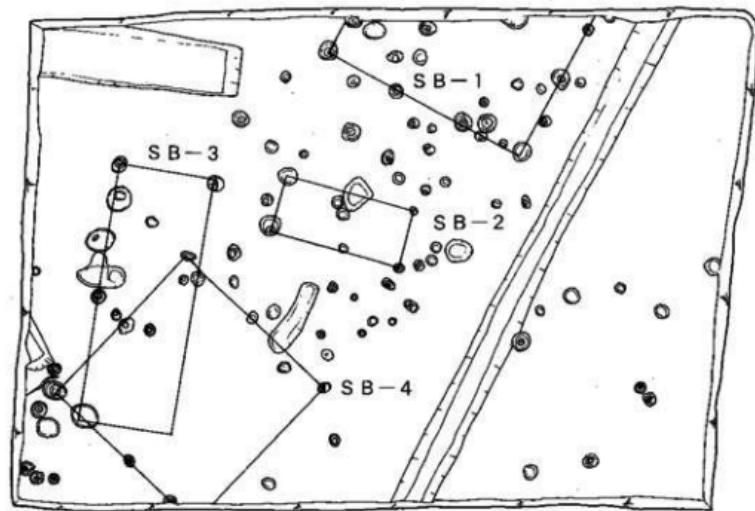


竹ヶ鼻遺跡 4 T 遺構図

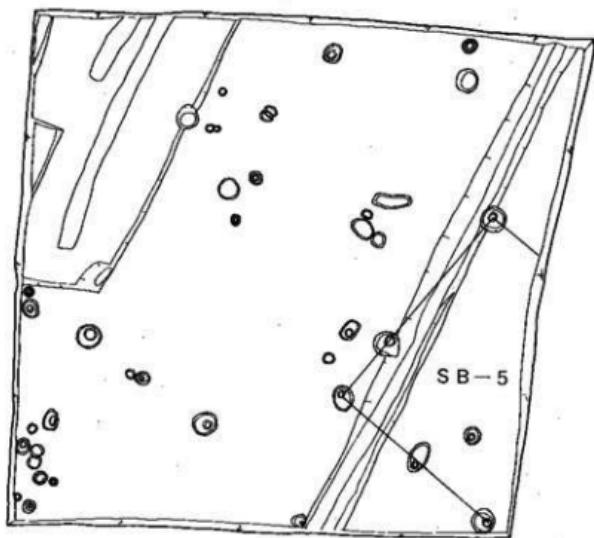


竹ヶ鼻遺跡 2丁遺構図

図版4

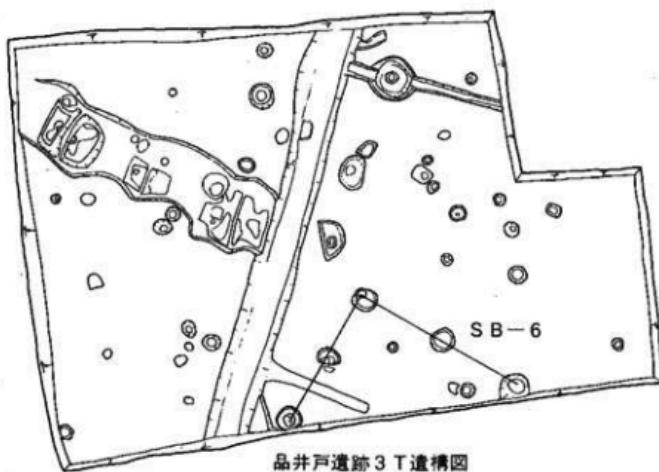


品井戸遺跡1T遺構図

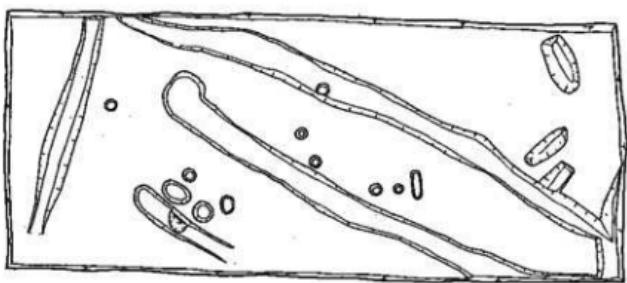


品井戸遺跡2T遺構図

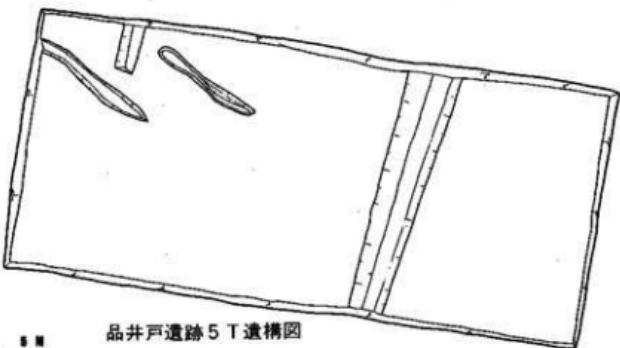
0 1 2 3 4 5 m



品井戸遺跡3T遺構図

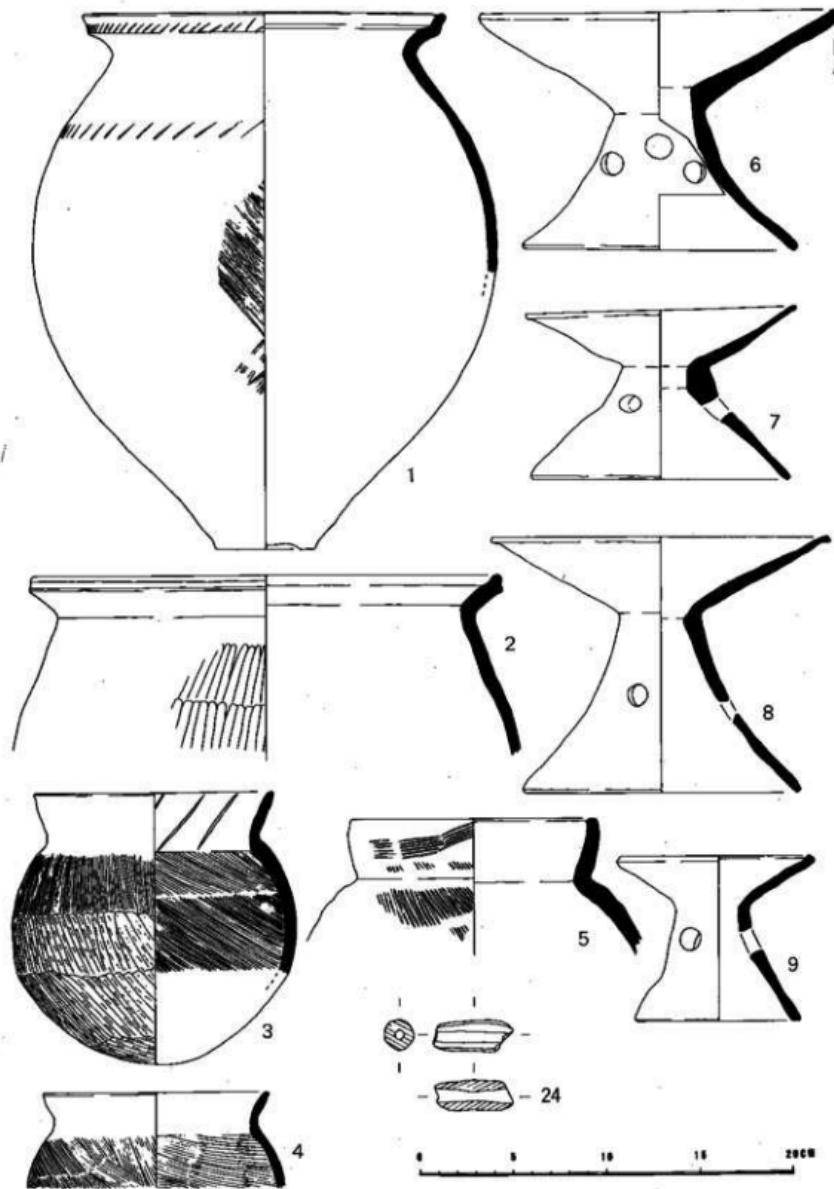


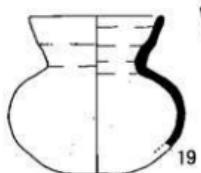
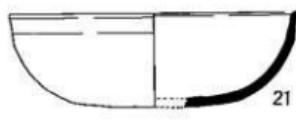
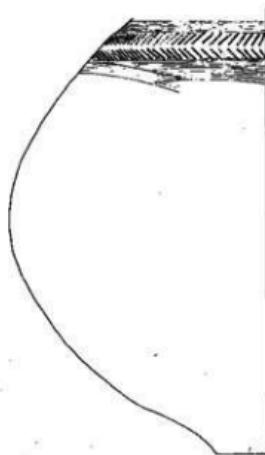
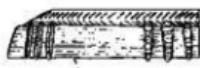
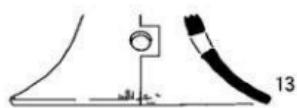
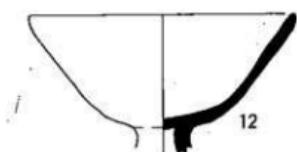
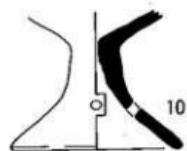
品井戸遺跡4T遺構図



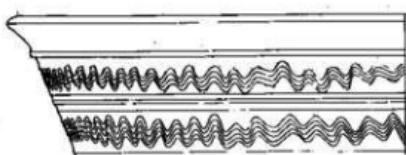
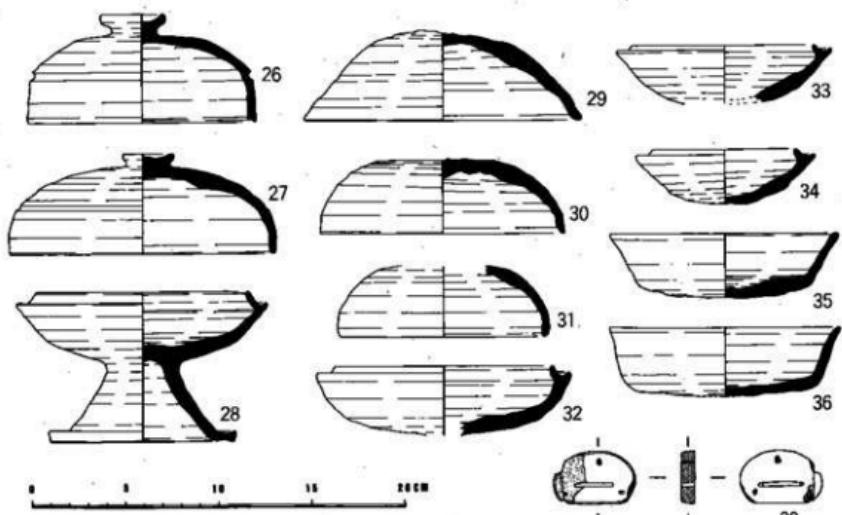
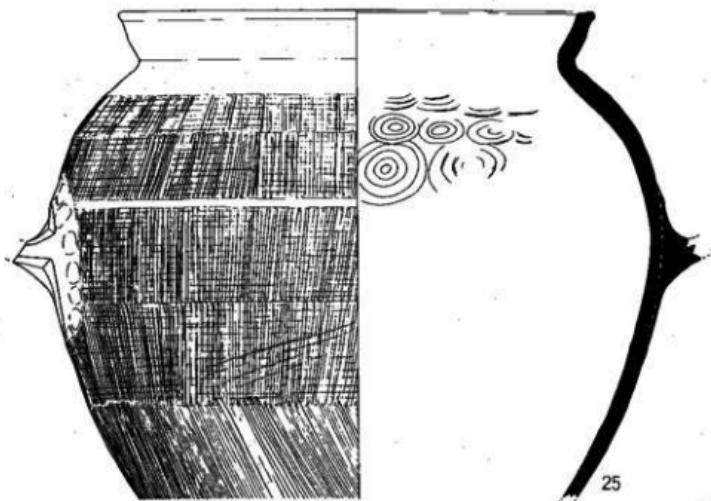
品井戸遺跡5T遺構図

0 1 2 3 4 5m





0 5 10 15 20 CM





竹ヶ鼻廃寺 2 T 近景



竹ヶ鼻廃寺 2 T S H - 3



図版  
II

竹ヶ鼻廃寺 2 T S H-1



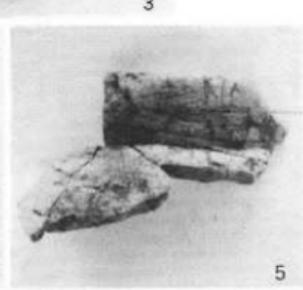
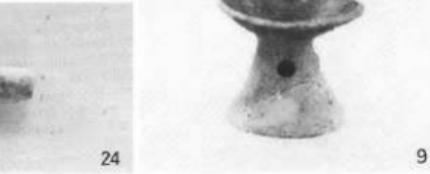
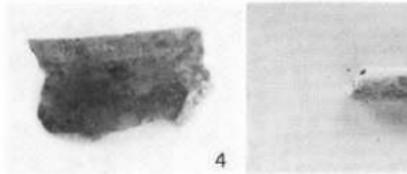
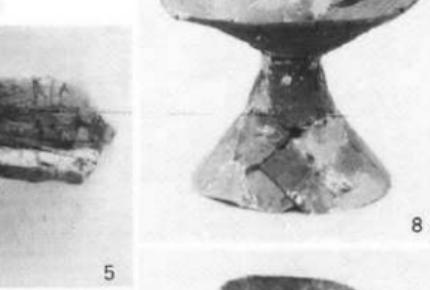
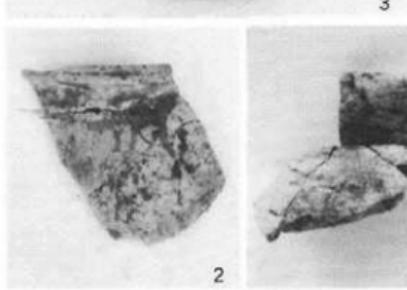
竹ヶ鼻廃寺 2 T 遺物出土状況

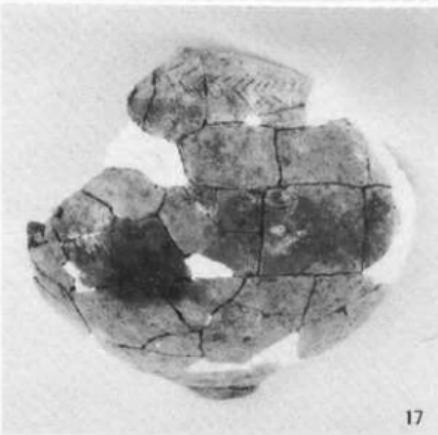
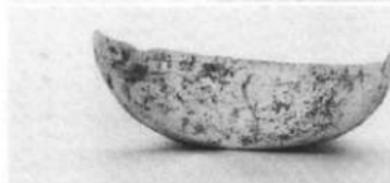
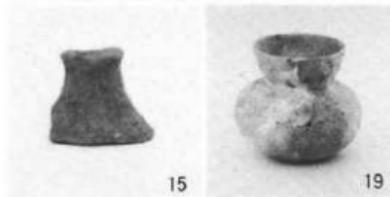
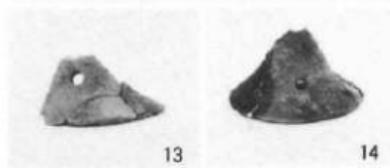


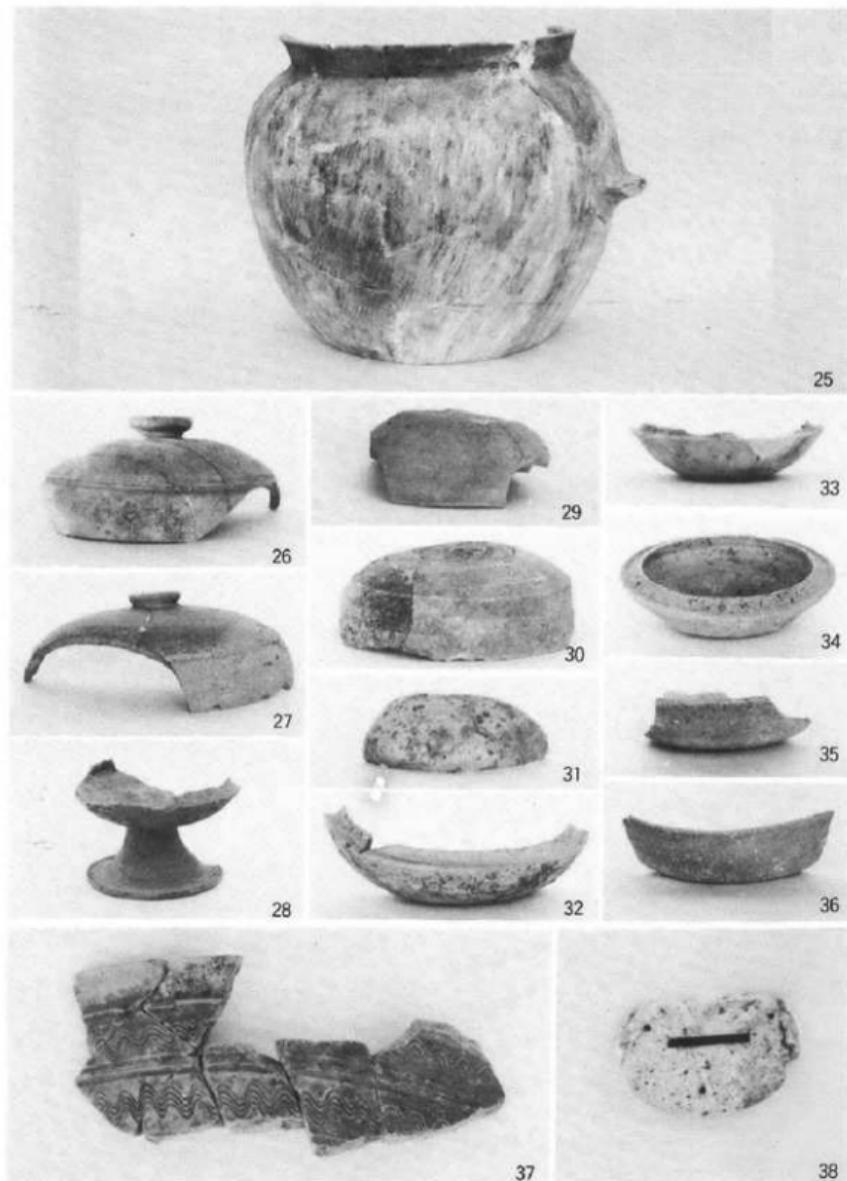
品井戸遺跡 3 T 全景

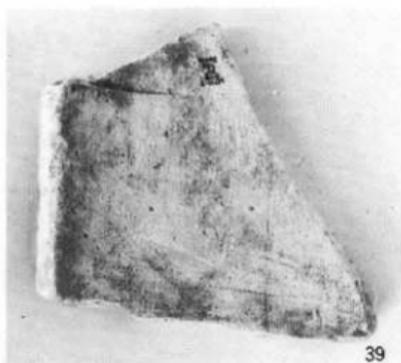


品井戸遺跡 1 T 近景





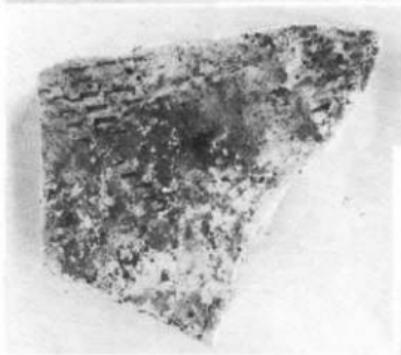




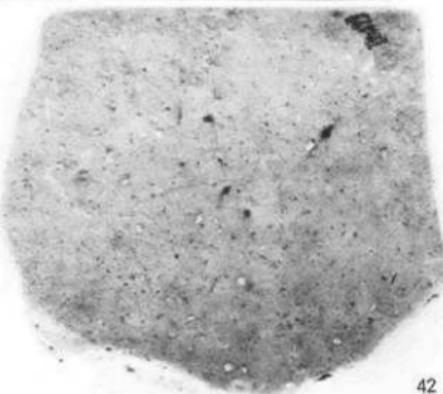
39



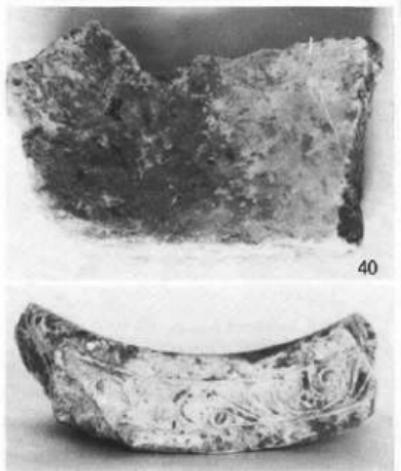
41



40



42



43



